

---

# 黒白の王

氷雨水夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒白の王

### 【Nコード】

N0488I

### 【作者名】

氷雨水夜

### 【あらすじ】

雪に包まれた世界。そこにはありとあらゆる生き物が生息していた。そんな生き物の中に、雪のような白い毛並みの狼がいた。その狼の王は人間が嫌いだった。ある日、彼ら狼がいつものように狩りに出かけたとき、人間に腹部を刺されて死にそうな少年に出会う。その出会いが王と狼たちの未来を変えることになった――――

## 1章もとい第1話：事の始まり（前書き）

読もうとしてくれてアリガトウ☆

忠告ー！

- ・相変わらずの駄文デス（汗
- ・もしかすると（想定では）短い……かも。

それでもいいなら読んでクダサイ。

## 1章もとい第1話：事の始まり

辺りは雪に覆われていた。

そこに真っ白な狼が一匹。

その狼は皆から『白狼王』はくろうおうと呼ばれていた。

彼は人の言葉を含む数多の言語を話すことができ、知能が高かった。だから彼は白狼たちの王として纏めていた。

あくまで白狼王は周りが呼んでいるだけであり、真実の名ではない。

けれど、王は真実の名を己が真に認めた者にしか教えなかった。仲間の狼でさえ知っている者はいなかった。

彼の名を知るのは彼自身のみ。

そんな王は、人間が嫌いだった。

彼らは白狼たちを恐れているからだ。

自分たちは生きるために獣を狩り肉を喰らう。

その行動を見た人間が仲間へ伝え、いつかは自分たちを襲うのではないかと怯えている。怯えたら怯えたで、己の安全のために滅ぼそうとする。

白狼は人の血肉を喰らえば神に匹敵する力を手に入れると言われている。

だが、どの白狼たちも力を欲さない。ただ生きるために必要最小

限の獣を狩っていた。この世界の生態系を崩さぬように。まるで守り神のように。

それに対して人間は必要以上の獣を狩る。雪原に生えていた何本もの木々も斬り倒されてしまった。結果、雪原に生息する生き物の数は減り、生態系に大きく影響した。この雪の中、強靱に生えていた木々や草花を見ることが珍しくなってしまった。

こちらから見れば、人間の方が恐ろしく身勝手だ。いつかこの星を滅ぼしてしまいうで――。

だから王は人が嫌いだった。

ある日、彼らは狩りに出た。この星の季節は常に冬で、生き物はあまりいないように思えるが寒さに強い生き物が多い。だが、先ほと言った通り、人間の手によって数は年々少なくなっているが。

王は獣の群れを見つけるやいなや、白狼たちに命じた。

「さあ狩りの開始だ。だが全てを狩ってはならぬ」

狼たちはそれぞれ疾風の如く飛び出して行った。

王もいつものように皆が行ったのを確認し、少し遅れて狩りに参戦しようと思っていた。

だが、声が聞こえた気がした。白狼の中の一匹もそれが聞こえたようで、王の所へ駆け寄った。

「王よ、今何かが聞こえなかったか？」

「ああ、聞こえた気がしたが――」

「……っ！」

また聞こえた。今度ははっきりと。

「どうして？」

人の子の声だった。

「もしか、あれか……」

隣の狼が言った。

そちらを見ると、人間の、幼い子供と親と思われる女が二人。子供の方は怯えた目をしており、女は冷たい目だった。

突如、女は子供を抱きしめた――否、子供の胸に刃物が突き刺さっていた。抱きしめたように見えただけだったのだ。

「お……母様……？」

母を呼びながら地面に崩れ落ちる子供を余所に、女は身を翻して去っていく。

「王、あれをどうするか。子供と言えど所詮は同じ人間。あのまま死なせてやるか？」

王は少しの間何かを考えていたようだが、仲間の問いに答えた。

「……放っておく訳にはいかぬだろう。あの小僧も連れて行き手当てをしてやれ」

「あなたにしては意外な答えだな。人間が嫌いではなかったか？」

「……フン。どうせ意識が戻りし時に我らを見れば恐怖で逃げ出さだろう。礼すら言わずにな。……それが人間だ」

王は重々しい口調で言った。

今日の狩りの戦利品は、数体の獣と小さな子供。  
人間嫌いの白狼王が何を考えていたのかは誰にもわからない。

## 第2話：幼き人の子供

狼たちの住处、洞窟。

捕らえた獣は雪を利用した食料庫に入れた。

重傷を負った人の子には薬草を与え、狼たちなりの応急処置をした。

子供は一命を取り留めたようだった。だが、未だ意識は取り戻さない。

王は目を閉じた幼き人を見ていた。

「何をしている？」

狼が王に問う。

「……別に、何も」

「そうか。……そう言えば、あなたの足の傷は人間にやられたそうだな」

「それがどうした」

「今更だが、この人間の子供が刺されたのを見て昔でも思い出したか？」

「……さあな。ただあの時、放っておく訳にはいかぬと直感で思っただけだ」

白狼王にもわからないものはある。もしかすると彼の言う通り、昔の自分と重なったのかもしれない。

「おお……かみ……？」

幼い声が聞こえた。



先ほどまで意識を失っていた少年の目がぼんやりとあいていた。

「目が覚めたか」

王は人語で言った。

「しゃべれる……の？」

少年は小さな声で話しかけた。

「我ら白狼はあらゆる生き物の言葉がわかる。だが実際に話すことができるのは我だけだ」

「そう……なんだ……。それで僕は……その……」

「心配するな、応急処置はしてある。傷が塞がるまでここにいても構わぬ。だが、我らが恐ろしいのならば――」

「ありがとう」

王は「恐ろしいのならばすぐに人間の元へ返してやろう」と言おうとしたが、子供が普通にお礼を言ったのに驚いた。

「おおかみさんが僕を助けてくれたんだよね？」

子供は優しげに微笑んだ。

「貴様、我らが恐ろしくはないのか？」

「ぜんぜん。父様たちはこわいみたいだけど、僕はそうは思わない」  
この子供は嘘一つ言っていない。純粹にそう語るのがわかった。

「……貴様、名は？」

「黒夢<sup>くろむ</sup>。君は？」

『貴様、仲間ですさも知らぬ王の名を軽々しく聞くととはッ……!』  
狼がそう言ったのだが、王以外は人語を話せないなので、少年――  
黒夢には何か吼えているようにしか聞こえない。

「？」

「我の名は誰にも教えぬ。信ずる者のみにしか言わぬ。しかし、我らの仲間は我を白狼王と呼ぶ」

「はくろーおー？」

『白き狼の王という意味だ』

「???」

黒夢が困っているので通訳をする。

「白き狼の王という意味だと言っている」

「王様なんだね。だけど白狼王って堅苦しい感じだから僕は君を白と呼ぶことにするよ。」

『何たる無礼なッ!!』

「……怒りをおさめよ。人間が我をどう呼ぼうがそちらの勝手だ」

『っ、しかし……』

「……いいのだ」

「えーっと……会話中わるいんだけど、その隣のおおかみさんは何て名前なのかな？」

『な……何を言って……!!』

突然問われて彼が戸惑う中、王がためらうことなく答えた。

「空露あくろと言う」

「よろしくー、空露ー」

『何あっさり言ってるんだ、王よーっ!!』

空露の声が洞穴中に響き渡った。

「そうだ、何かお手伝いできるかな？」

「貴様は大人しくしている、人間が何をするかわかったもんじやない」

「白、酷いよー」

笑いながら黒夢は言う。

彼は白狼を恐れていなくても人間だ。白狼たちからすれば恐ろしい生き物の子供。何かとんでもないことをしでかすかもしれない。どんなことになるうと彼を信じることなどできないだろう。

「空露、お主に黒夢の世話を命ずる」

『王の命と言えども嫌だ』

「黒夢よ、ここで過ごす間は空露と共に行け」

「わかったよー」

『……私の意見は無視か』

——この王、押しつけやがった。

空露はなんだか泣きたくなってきた。

## 第2話：幼き人の子供（後書き）

少年と狼その1の名前登場！

白狼王の本名はまだまだ先になりそうだなあ……

### 第3話…人の子と狼の戯れ

「ねえねえ、空露ー。遊ぼー！」

『どうして人間と遊ばねばならないのだ』

空露が愚痴っても狼の言葉なので黒夢には通じない。

「んー、これだけ広いしかくれんぼがいーかなー。僕が隠れるから空露がオニねー？」

『……はあ』

「十秒数えてから探してねー！」

黒夢は無邪気にそう言って、走り出して行ってしまった。

『……メンドい』

——まあ適当にやればいいか。

空露はそう心の中で呟くと、きっちり十秒数えてから歩き出した。

20分後……相手は小柄な子供。意外にも広いこの洞窟ではなかなか見つからない。匂いを辿ろうとしたら白狼王に会った。

「ほお、かくれんぼか」

『私に全てを押しつけての第一声がそれか』

「押しつけたつもりはないが？」

白狼王はキョトンとしたように首をかしげた。

『……殴ってもいいか』

「王である我を殴ると言うのか。そうか、そうか。だが我らの場合、殴るというよりは蹴るの表現が正しいな」

『王以前に私とあなたは一応友だろう。だから殴るくらいはいいよな？』

白狼王と空露は古くからの友であり、空露は王の真の名を知っている。

信じているものにしか名を教えないことに気を配って、普段は王と呼んでいるが。

「ふむ、一度くらいは殴られても良いかもしれぬな」

『……え、ホントに言ってるのか？まったくお前はあの小僧といい、今といい、時々何を考えているのかわからない』

「……その言いぐさでは殴らないのか殴らなくていいのか。今の貴様の方が考えていることがわからぬ」

王は呆れたように言い放つ。

空露は空露で、友と言っても王のことをよく知らない。彼は空露の幼き頃について知っているが、自分自身のことを多く語らないので、彼の過去に何があったのかを知るのは彼自身のみ。

今日という今日は聞かせてもらおうか。

『殴るのは後にするとして、王は――』

「空露ー遅いよー。僕ずっと隠れてたのにさー」

そこに黒夢が欠伸をしながらこちらへ来た。そういえばどれくらいの時間話し込んでいたのだろうか。：にしても、聞きそびれてしまった。

「あ、白も一緒だったんだ」

「黒夢、遊ぶのはいいが傷がまだ治っていないのだから寝ているべきだ」

「だってつまらないもーん」

「……空露、こいつがあまり無茶せぬように見張れ」

『はいはい、わかりましたよ……』

空露は気の無い返事をする。

本当にこの王は私に何がしたいのだろうか……。。

小さく心の中でそう呟いた。

「空露ー暇なんだよー、返事してよ空露ー」

『五月蠅い』

「あっ、今五月蠅いって言ったでしょ？」

空露は少しドキッとした。まるで心を見透かされたような――

『何故わかった』

「あははー今度はどうしてわかったのかって言ったでしょー？」

無邪気に笑うその表情から、何か確信を持っているように読みとれた。

「あのねー、なんとなーくだけみんなの言ってることがわかってきたんだー。全てわかるわけじゃないけど」

人間が。しかもその幼き子供が。わずか二、三日で狼の言葉を理解し始めた。

これは驚かないわけがない。

「実はねー、白の通訳とおおかみさんたちが言った言葉をまとめて覚えてたんだー。そしたらなんとなーく」

『ほお……』

「おなかの傷が治るまで暇だしさー。治ったら遊んでねー」

『嫌だ』

「嫌だって言ったー！絶対遊ぼうよー。楽しいよー？」

人間嫌いの狼の王が助けた人間の無邪気な子供。

この子供には何か特別な力でもあるのだろうか。  
同じ人間には無い何かを。



### 第3話：人の子と狼の戯れ（後書き）

わかりにくいけど空露はオスだ。  
つまりこの話には女っ気が無い！  
出す機会が全然無いけど。

#### 第4話：時に逆らえる者はなし

いつかその時はやってくる――

数日経って、黒夢の傷は癒えた。

白狼王が黒夢へ言った。

「さあ、貴様は人間たちの元へと帰るのだ」

「……嫌だよ……」

「我らは狼。貴様は人間。環境も何もかもが異なっているのだ。ここはおぬしの居て良いところではない」

王はただ淡々と黒夢に言い聞かせた。

だが、黒夢はそれを拒んだ。

「僕は……帰ってはいけないんだよ……。忌み子だから、駄目だ。僕は、他の人たちが生きるために、人柱にならないといけないんだ、ってお母様が……」

だんだん、黒夢の声が震えたものになっていった。

そう。初めて出会った時、黒夢は母に腹部を刺されている。あの時、人柱として捧げようとしていたのか。

「そんなもの、考える必要などない。我が生きてきた間はそんなものは無かった。おそらく貴様の母が何かつじつまをつけて殺そうとしたのではないか？」

「お母様はいつだって優しい人だった！そんなこと……そんなこと……絶対に……ないもん……」

言葉が少しずつ弱々しいものになっていく。

『黒夢……』

たまらず空露は名を呼んでいた。完全に人間を信頼しているわけではない。だが、この数日で小さな幼子に情が移ってしまったようだ。

「空露も、僕に帰るべきだと思ってるの？」

黒夢は希望にすぎるように空露に問う。

『それは……』

空露は言葉に詰まった。

黒夢からすれば一度殺されかけた母の元へは戻りたくないだろう。だが。

『帰るのだ』

——人が住むべき場所ではないのだから。

「空、露……」

黒夢は悲しそうに呟くが、今は情をかけては駄目だ。

『あの時、狩りをしていた付近に人間たちの集落がある。恐らくそこに黒夢は住んでいたのだ

ろう？ 私がそこへ送っていかう。それでいいな、王よ？』

「構わぬが……人には見つかるなよ。見つかったらどうなるかもわからぬ故に」

『それくらい、わかっている』

「黒夢よ……人の世界に戻り、今までのように暮らせ。それでも辛くなったらまたここへ来ても良い」

「……本当に？」

「ああ、本当だ」

王は優しく微笑んだ。

「それじゃー、白やおおかみさんたち、また会おうねー！」

『では、言ってきます』

「黒夢を頼んだぞ、空露」

『わかってますよ』

そう言って子供を背にのせて銀世界へと出ていった。

『……あの、何故そこまで人間の子供へ肩入れするのですか？』

一人と一匹の姿が見えなくなると近くにいた狼がオドオドしながら王へと言った。

「空露も黒夢も今は死んではならぬからだ」

『空露も何か関係しているのですか？』

「……ああ」

さも、辛そうに。

「本当は残酷な真実を知らぬ方が良いのだが……。そう言う訳にも  
いかないようだしな……」

『王？』

一人でぶつぶつと言い出したので狼が呼びかける。

「……いかなる者でも時の運命さだめには逆らえぬ……」

『王！、聞いてますかー？！』

狼は全然上の空な王の耳元に向かって大声で叫んだ。

「お、おお。すまぬな、少し考え事をしていた」

『あまり無茶はなされぬよう』

「わかっているとも」

『困ったことは必ず相談、ですからね？』

「それもわかっている」

そして王は周りの狼でさえわからぬ程の小さな声で呟いた。

「我はおぬしたちを決して死なせはせぬ」

それは何かの決意のようだった。

#### 第4話：時に逆らえる者はなし（後書き）

……この後、どう話繋げるか考えてなかったorz

ご利用は計画的にねwwww

## 第5話：想いは儂きもの

『黒夢、大丈夫か？』

今日はいつもとより吹雪いて天候が悪い。自然の中生きる白狼はともかく、自ら造った機械に頼る人間からすれば危険だろう。

「うん、僕は大丈夫だよ」

この子供は笑顔でそう言うが、多少無理をして言っている気がする。

——早く送らねば。

空露はできるだけ急いだ。

目的地は人間の住む集落。距離はそこまでない。このペースならすぐにでも着くだろう。

「ところで空露。僕のお父様は彩<sup>さい</sup>亜<sup>あ</sup>って言う名前です。とても優しいんだ。だからきつとお父様に言えば、おおかみさんたちみんなを護ってくれると思うよ！……そうすれば僕は白や空露や他のおおかみさんともずっと一緒にいられる……。こんな願い……。我儂だよね……」

『……すまないが私からは何も言えない』

「……そっか。そう……だよね……」

黒夢は笑うが、どこかぎこちないものだった。たった数日とは言え、この子供が狼と過ごした思い出は大きなものだったようだ。

そんなことを考えているうちに集落へとついた。

『さあ、行け。ここからは歩いて行くのだ。私は人間に見つかる訳にはいかないからな』

「うん、空露、ありがと——」

『……っ！』

刹那。空露の身体にボウガンの矢が数本刺さり、雪の上に崩れ落ちた。

「無事……だったか、黒夢」

「彩亜……お父様……どうして……」

黒夢の父、彩亜とその周りの人間はそれぞれボウガンを持っている。恐らく彼らが空露に——

「お前が母さんと出かけた日からずっと探していたのだよ？……だが安心しろ。お前を殺そうとした母はここにはもういない。これからは苦しい思いはしないからね？」

さきほど黒夢が優しいと言ったこの男は、方法はどうあれ、容赦なく妻を殺したと言うのか。

『この……愚かな人間……め……』

空露が血を流しながら呻くように言った。

「おや、まだ生きていたのか」

彼らはボウガンを重傷の狼に向けた。

「お父様、待って！あの時、僕を、死にそうだった僕を助けてくれたんだ！だから殺さないでっ！」

「お前は騙されているんだよ。狼たちはお前を喰らうために助けただけだ」

彩亜は優しく我が子に微笑んだ。

「そんなの違うッ！」

「黒夢、我々は人間だ。そして人間を統率し守らねばいかぬ王族でもある。人間に仇なす恐れのあるものは駆逐せねば」

彩亜は笑みを表情から無くして、冷徹にそう黒夢に言った。

『……王……族……？！』

空露からすれば衝撃の一言であった。

彩亜は人間の王で、その子である黒夢は次期王。そうとも知らずに一緒に過ごしていたのか。

「黒夢、そこからどきなさい」

彩亜は一步ずつ近付いてくる。黒夢を空露から遠ざけようとしているようだ。

「嫌……だ。絶対にどかない。僕は例え狼でも……友達だから……空露を守る」

「……【アクロ】？」

彩亜の動きが鈍った。

「何を言ってるんだ、【アクロ】なんて……」

明らかに【アクロ】という言葉に動揺している。一体どうして。

「……まさか……そんなことなど……」

「……お父様？」

黒夢にも、空露自身にも全くわからない。

「不思議だろう？ 【阿黒】は死んでしまってもあの悲劇が起こらないと思っていたのに、今こうして【空露】としてここにいる」

——声が響いた。とても澄んだ声だった。

そちらを見ると若い男が立っていた。

白髪に足には傷跡。ラフな服装であるのにどこか神々しさを感じる。

「き、貴様はッ?!」

彩亜は彼の姿を見て、さらに動揺した。

「ふふ……久しいな、彩亜。……さて、久方ぶりの話に真実でも語



らぬか？その狼と少年に聞かせてやるべきだと我は思っている故」

彼は微笑んだ。同姓の男すらも見とれるほど妖艶に。

## 第5話：想いは儚きもの（後書き）

わー、訳ワカメー。

だけど白髪お兄さんがでたぞー！

お兄さんって言ってもモロバレな書き方したけど……（汗

続きどうしよ……。

あれ、前にも同じようなこと後書きで書いた気がする……

## 第6話：呪縛と怒り 狼と人（前書き）

風邪で暫く更新出来なかったし……  
しかも何かグダグダ……

## 第6話：呪縛と怒り 狼と人

「さて、何から話すべきか……」  
青年はどこか楽しそうに呟く。

「貴様……」

「そう怖い顔をするでない。そうだな……、とりあえず先にその狼の傷を癒してからの方が良いか」

どこからか扇を取り出すと、空露へ軽く仰ぐ仕草をした。すると、一瞬にして矢が消失したかと思うと、同時に傷も元から何も無かったかのように消えた。

黒夢は呆然とそれを眺めていた。  
傷が治った空露は身体を起こす。

『……お前は何者だ。名乗れ人間』

「せっかく、助けてやったというのにその言いぐさか。我はもう人間ではないと言うに。まあ良いか。この足の傷でわかるかもしれぬが……。我の名は――」

彼は言いかけた言葉を呑み込み、少し考えて答えた。

「ううむ……しかし答えるべきか……。名を言えば正体がバレてしまうからな……」

「――余計なこと語られる前に……もう一度、死んでもらうぞ、虚<sup>はく</sup>白」

彩亜はボウガンを彼に向けた。

『……え、虚白？』

空露はポカンとしていた。

その名は確か――

「なっ、そこで我の名を言うのか！どんな話でも聞け、そして空気を讀むのだ、彩亜！」

青年——虚白は少し怒った様子で言ったが、彩亜は落ち着いて返す。

「……俺は王として我が子にあのことについて聞かせるつもりはないだけだ」

「ふむ……自らの子を己の望む“人間だけが住む世界を創る”王にしたい故か？」

「……ッ！」

さっきまでふざけていたかのような態度が一変し、妖しげな笑みを浮かべて。

「神の怒りを買って、人間にかけられた呪いの一つを消すためにか？」

「呪い？」

黒夢が何気なく口に出して呟いた。

「それ以上……言うなッ！」

彩亜の叫びと共にボウガンから矢が放たれる。疑問に答えるかのように虚白は矢をかわしながら言葉を繋げた。

「同じ人に殺された人間が白狼に生まれ変わってしまうという現象を解くためか？」

『生まれ……変わる？』

白狼が、人間の生まれ変わり？だとしたら自分は、【空露】という存在は——

「この子供、黒夢が生まれる前に汝の長子【阿黒】があ的事件で亡くなったな。そして神の慈悲により狼へと——」

『……私に……生まれ変わった……？』

「……そうだ。誰にも話すつもりは無かった事実だが……」

『ならば……ならば、あなたはどのような！私には人の頃の記憶など

ない！だが、あなたは……なぜ、覚えているのだっ……！なぜ、知っているのだっ……！』

混乱している中での信じ切れない事実、思いが言葉となって溢れ出す。

「落ち着くがよい、狼よ。……我は一度、自らに殺された。王の意思に逆らったためにな。その時、神に会ったのだ。数多の呪いをかけたと言う神に。神は罪無き人間に最後の慈悲をかけた。少しでも生きるようにと。人間にとっては呪いと思えぬものをな。そのための先導者として我は神より力を授かった。【虚白】の生きていた頃の記憶と共に」

扇を軽く振ると彩亜の手のボウガンと背の弓矢が空露の時のように消え去った。

そして悲しい微笑みで独り言のように言った。

「できればこんな力など欲しくなかったのだがな」

## 第6話：呪縛と怒り 狼と人（後書き）

前書きにもあったけどホントにグダグダ……  
虚白もあんな状況下ふざけ過ぎだし↑筆者

何か説明長くなりそうなので次回は回想シーンの予定。  
2009年11月某日、回想シーンの設定を考えた結果、多少内容  
を変えました。

## 第7話：互い想いすれ違い（前書き）

こんな展開にする予定じゃなかったはず……（汗）  
どうしてこうなったんだ……↑作者



## 第7話：互い想いすれ違い

——あの頃は平穏のはずだった。

「虚白、赤ん坊が生まれたぞ」

「おお。時期王はその子に決まりだな」

「ああ」

嬉しそうに頷いた。

「……して、名は？」

「妻と相談した結果『阿黒』にしようと思っている」

「阿黒？不思議な名だな」

そう言い返すと彩亜は説明した。

「阿黒の“阿”と言うのは阿修羅という意味で、強く成長してほしいからだ。そして“黒”と言うのは——」

そこまで言っ言葉を呑み込む。

「……“黒”と言うのは？なんだ、どうした？」

虚白の疑問に彩亜は答えづらそうな様子だった。

「……俺たち人間の呪いを消すほど黒く塗り潰してほしいからだ」

——呪い。神の怒りにより起こった、人間たちへの呪縛。

今までの先祖たちが数多の呪いを解こうとしたが、それは全て失敗に終わった。

「……そうか。今度の代でこの呪縛から一つでも多く解き放ってほしいものだし……な」

「我らの悲願を叶えてほしい、と言うのもあるがな」

「そういえば、お前の妻は二人目の赤ん坊を既に身ごもっているらしいな」

突然、虚白が出した言葉に彩亜は顔をしかめた。

「……なぜ知っている」

「共に暮らして何年になると思っている？幼き時より仲良くしていれば、お前の心情などまるわかりだ」

クックツと笑って見せる。

「確かに昔からの幼なじみだが、だからと言って普通は人の心情などわからないぞ。それなのに……お前はエスパーか……」

「超能力か……。それも悪くはないかもしれぬのお」

「あー、お前と話していると色々話が逸れそうだ」

「彩亜様！ここにおられたのですか！」

二人して声が聞こえた方を見ると、側近と思わしき男がこちらへ慌てて向かってくる。

「どうかしたのか？」

「先ほどお生まれになられた子の状態があまり思わしくありません……」

「なっ……」

和やかなムードは崩れ去り、状況は一変した。彩亜も虚白も表情が凍り付いている。

「……出生直後は元気だったのですが、急に状態が悪化し、今もお衰弱しています」

「――行くぞ、虚白ッ！」

「わかっていとも」

二人は走り出した。この世に産まれたばかりの幼子を救うために。

まるで雪と同化したかのような外壁の病院へ駆け込むと、衰弱した阿黒と呼ばれた幼子がいた。

中にいた女医が虚白に気付いたかと思うと叫んだ。

「虚白先生っ！」

「先生と言われてももう我は医者ではないと言うに。だが人の命がかかっておるしそうも言ってられんの。お前は下がれ。……どれ」

女医が部屋を出た後、小さな体に触れると氷のように冷たかった。息はかろうじてまだあるけれど。

「どうだ、虚白？」

「……」

彩亜の言葉には答えず、息や脈、体温など、わかる範囲のものを手際よく調べていく。その間の虚白の顔は赤ん坊の状態を調べれば調べるほど苦痛に染まっていった。

そしてようやく彩亜に言葉を返した。

「どんなことがあっても、お前は耐えられるか？」

——結論は、二つ。

「っ！それはどういう……」

——どっちにしても、恐らく彩亜を待ち受けるのは地獄。

「衰弱はしているが、死にはしない。しかし、人間としては——生きれない。」

「……っ！」

絶句して何も言えなかった。彼は淡々と感情を覆い隠すように言葉を繋げる。

「……人のように話せない。人のように歩けない。要は植物人間に近い状態だ。それが死ぬまで永遠に。彩亜、お前には選択肢がある。それは……」

「この子を植物人間の状態で生かすか。それとも命を絶たせるか」

「何を言っているっ、自分の子を殺すなんて出来るわけないだろう！そもそも忘れたのか？人を殺すと言うことは――」

虚白は少し俯いて、悲しげに。

「わかっているとも。神にかけられた呪いは、罪を犯した者が受ける。彩亜、お前ならそう言うと思っていた。お前は人間の王だ。だから……代わりに我が殺る」

「そんなもの俺は認めないっ！息子も友人も苦しめはしたくないっ！」

「ならば次の王はどうなる？兄が何も感情を持たない人形であるのを耐えられると思うのか？」

「それは……」

彩亜は言葉を濁した。

「さっきも言ったがお前は王だ。早く命じてくれ。我に『我が子を殺れ』と」

「……嫌……だ……」

彩亜はその場に崩れ落ちた。しかし、虚白にとっては想定内のことだった。

「ならば、我は王の命に背いた罪でこの子もろとも死のう」

言い終えると腰から素早く短刀を抜き取って、赤ん坊の腹へ刺した。紅い血が辺りに飛び散る。

「虚白ッ！」

刺した彼も腹部が紅くにじんんでいた。だが彼はそれでもためらう

ことなく、トドメとばかりに足も刺した。その瞬間、同じ箇所からも血がにじむ。

「怨む……なら怨……め。我は……王殺し……の重罪人……だ。もし生き返ったら……、またお前に会ったなら……、迷うこと……なく……殺そうと……して……も……文句は……言……わぬ……」

「……すまない」

「何故……謝るのだ……。我が……勝手に……やったこと……。だ。お前の命……に背い……て」

虚白はゴホゴホと吐血した。

「もういい。喋らなくていい。——だから……」

「泣きそう……な……顔を……しおって……」

そして虚白は言葉を発せずに口だけを動かした。

『さよなら、我が友よ』と。

それきり彼も、赤ん坊も、全く動かなくなった。

この紅く染まった部屋には、悲しみと怒りがまじった複雑な感情を持った王のみが取り残された。

## 第7話：互い想いすれ違い（後書き）

……ハイ。カッコよかったはずの虚白兄さんが何かヤンデるね  
ハッ！これがヤンデレというやつか……（違

今回、改めて話の展開を考えた結果、2009年11月の某日に1  
話前を多少変えてあるのでそちらの確認をよろです。

次話は現在の時間軸に戻る予定。

前回のぶり返しなのか風邪っぽいので更新はまた先になるかも。  
インフルエンザではない……はず……  
みんなも風邪に気を付けようね☆↑何だお前

## 第8話：戸惑いは裏切りを呼ぶ

「思えば――、あの後このようなことになったのだったな」

虚白はヒラヒラと扇をはためかせながら言った。

「……に、してもだ。何故汝は、お前は、人間のみの世界を望むようになったのだ？ 神より聞いた話故、詳しいことは知らぬのでな」  
彩亜は怒りを目に灯して答えた。

「お前がっ、阿黒がっ、死んでからは突如として肉食の獣共に襲撃されたっ！ 何人もの犠牲者が出たんだっ！ もう誰も失いたくないんだっ。だから障害となる者は全て駆逐するッ。お前は言ったよね？ もし再び俺の目の前に現われるならば、殺されても文句は言わないと。狼の味方をするならここでもう一度殺すっ！！」

「そんな単身で……か。まあ、よい。ほれ、先ほどお前の手にあったボウガンだ。これをぬしに返そう」

先ほど虚白が消したと思われていたボウガンをどこからともなく出すと彩亜に渡した。

「撃つならさっさと撃て。それが、あの時の約束……だからな」  
その表情にためらいというモノは見られなかった。

「だ、だめえっ！ 白をうたないでっ！」

ずっと黙って様子を見ていた黒夢が涙目になりながらも虚白の前に立ちふさがった。

「「黒夢……?!」」

その行動は虚白にも彩亜にも予想外の出来事であった。

「お父様……、うったらだめ……だよ……。たとえば人じゃなくてもこれ以上こころしたら……だめ……」

「だが……」

「——っ!？」

彩亜の顔が苦痛の色に染まった。背中にはボウガンが深く深く突き刺さり、服が赤黒くにじんでいる。

後ろを振り返ると、一緒にいた人間の男がボウガンを構えている。

「貴っ……様……何を……」

「もう話はそこまでにしましょうよ」

飄々として男は答える。

「正直ね、あなたは王には向いていない。昔から親友だの、子供だの、自分の周りしか見ていなかった。他の人間がどう思っているのかも気付いていなかった。だから、仲間たちと決めたんですよ。殺せる機会があるのならいずれ一族もろとも滅ぼそうって。罪を犯せば呪いを受けることぐらい知っています。ですが後々の人類のことを考えれば滅びの道を辿るよりましですしね」

「堕ちたものだな、人間も」

虚白は挑発するかのようには言葉に男に浴びせた。

「おや、『化物』は黙っていて下さいよ。これが自分たち人間という種です。それに、その“元”王の物と違ってこのボウガンの矢には猛毒を仕込んであります。挑発のつもりかどうかは知りませんが、隙を見つけようたって意味はありませんよ。じきにその王は死ぬ。……確実にね。そうしたら次はその餓鬼です」

彩亜が……死ぬ？次は黒夢……が？

「……ふざけるなァッ!」

虚白から神力が一気にあふれ出る。



——もう、人間に罪を犯させたりはしない。罪を背負うのは自分一人で充分だ。誰に恨まれても構わない。親友になら、なおさら恨まれても構うものか。

だが……

ボウガンも一瞬で全て消し去って。

——親友も、その子供も、仲間の狼も、この『白狼王』の前で侮辱することは許さない。

「ひっ……」

——どうせ自分は人ではなく『化物』なのだから。罪を犯したとて、呪いを恐れたりはいしない。

「死ね」

そう短く冷たく言った。

その瞬間、彼の命はこの世から無くなっているはずだった。

だが、何故か男は生きており、手にはボウガンがあった。先ほど虚白が彩亜に返したものだ。落ちていたものを素早く取り虚白に向けて射っていた。

「くっ……」

運の悪いことに体に矢が深々と刺さっている。そこから温かい血が止まることなく溢れ出す。

感情に流されて力を爆発させた結果だろう。神の力が上手くコントロールできず、傷が簡単に癒えない。

——自分は馬鹿か。怒りに身を任せ力を使えばすぐにコントロールできないことを知っていたはずなのに。感情に流されて力を暴発させた結果だろう。コントロールがきかず傷が簡単に癒えない。

「どうやら形勢逆転のようですねえ」

男のあざ笑う声。

……また……守れない……のか……？

違う声が、白い姿が目の前を覆った。

「我らが王に手を出すなッ！」

空露だった。ずっと己や白狼王の正体に戸惑っていたはずの。

「邪魔ですよ、忌み子」

「……私は狼だ。誇り高き白狼だ。人間の『阿黒』などここにはいない」

それはまるで自分に言い聞かせるようだった。

虚白はそんな彼を見ながら意識が薄れていくのを感じた。

——王を裏切る真似は決してはいけませんよ。

脳裏に響く昔の記憶にある誰かの声。

——貴方は最後の……

“最後の”……なんだ？

——サヨナラ、虚白。

置いて行かないで。お願いだから……

——さよなら、サヨナラ、サよなラ……

そうだ、自分はここで朽ちてはいけない。死ぬ時は王のために。  
そうあの人たちから言われたのだから。一体“最後の”何なのかは  
思い出せないが。

そして虚白は忌まわしい記憶から再び現実へと覚醒した。

最初に視界に入ったのは、紅く染まった二種類の白だった。  
——雪と狼と言う名の。

## 第8話：戸惑いは裏切りを呼ぶ（後書き）

相変わらず我ながら訳ワカンネ☆

白、アンタの性格はクールだと思ってたよ……↑一応作者

## 第9話：其の言の葉は呪詛となりて

「空露……？それに……彩……亜？」

二人とも……息を……していない？

「ああ、まだ生きていたのですか。全く『化物』はしぶといですね。気絶とはいえ、あれから10分も経っていないのに意識を取り戻すなんて」

笑う男の傍らには涙目の黒夢がいた。怒りと悲しみが入り交じった表情で男を睨んでいる。

「あはは！その目ですよ！もっと憎みなさい。怒りなさい。負の感情にのみ込まれて汚れて醜く死んで逝きなさい」

——ん……？何だ、この違和感は？

あの少年を取り巻く空気の何かが……違う。

「黙りなさい」

黒夢が表情を変えずに突如そう言った。普段の黒夢の言葉ではない。

男はビクツとして小さな子から離れる。

「……あなたは何です？少なくともその子供は……そんなことは……」

そう。黒夢はあんな言い方をしない。例えこんな状況でも絶対に。

「罪深き人間に名乗る名前などありません」

——この響きはどこかで……

「もしや、ぬしは……」

虚白が何かを言いかけると黒夢の姿でそれを遮った。

「今は内緒ですよ、虚白ちゃん」

——やっぱりこの人は……

「さて、罪深き人間よ、何か忘れてはいませんか？」

「……？」

「……人の呪い……か？」

この男は彩亜を、空露を殺した。罪を犯した人間への呪い＝死じやないのか？

「ええ、そうですよ、虚白ちゃん。あなたが体験した呪いであればすでにこの男は死んでいる。しかし、この男への呪いは違うものですから生きている。……まあ、やや発症は遅いようですが」

「違う……呪い……？」

——何だ、それは？

そう言いかけようとした時だった。

「う……うわああああっ！こっちにくるなっ！！」

男が発狂したかのように声を出した。

「あなたの罪、執行させて頂きます」

「え……いや、これは何の呪いなのだ？」

「本人にしかわからぬ——彼が殺めた人の念が迫ってくる幻覚を見

ているという呪です。死ぬまで永遠にね」

クスツと笑ってみせる。

「神のくせに……鬼畜なことをするな……」

——この少年の姿をして話しているのは、人間に呪いを、虚白に力を与えた神だ。

「あー、内緒って言ったのに普通に神様って言いましたね」

神だとは微塵も感じさせないような朗らかな声で言う。

虚白はやりにくそうに神様に言葉を紡ぐ。

「……にしても、聞きたいことがあるのだが。何故黒夢の姿なのだ？」

「あれ、わかっていなかったのですか？この子はこの世界に滞在するためにぴったりでしたから」

「……神憑きの子か」

——まさかこんな子供が神を降ろせるとは……

「はい、虚白ちゃんの姿も見たかったので、黒夢くんの身体を少し借りました」

「それで……どうするのだ？あの発狂男……」

さつきからワーワーうるさい。

「騒がしいと思っているのは同感です。しかし放っておきましょう。呪いの意味が無いですから。——さて……その狼をこちらに」

「空露をどうするつもりだ？」

「生き返らせます。今が真の天命ではないですから。ついでにあなたの力も回復させましょう」

「それなら……彩亜は？駄目……なのか……？」

死んだのは空露だけではない。彩亜もだ。彩亜にとって今が天命

だったのか？

しかし神から返ってきた答えは意外なものだった。

「だって生きてるでしょう？」

「……は？」

「いや、だからその男は生きてますよ？」  
虚白は彩亜に近付く。

「いやいや、神と言えどそんな冗談は通じんぞ。さっき確認しているのだぞ。ほら彩亜は生きてなど——」

彩亜の脈に触れた時だった。

ドクン、ドクン、ドクン。

「……ん？」

「あ、バレた……」  
死んでいたはずの彩亜が口を開いた。

「彩……亜……？」

何か、虚白からゴゴゴゴ……とオーラが見える。

「じ、実はあの男の呪いがどうか言う頃に目覚めていてな。その……話せば少し長いと言うか……」

「お前……っ！」

一步一步、彩亜に詰め寄る。

「す、すまん、色々謝るからっ！理不尽に刃向けたこととか謝るか  
らっ！」

「良かったッ……」

ギュッと彩亜を抱きしめた。

「……え？」



「もう誰かが死ぬのは見たくなかった。ましてやお前が死ぬだなんてっ……」

「あの……な？ お前が従者として親友として心配してくれてるのはわかったけどな……。いくら何でも過保護だ。離れろ、気持ち悪い」  
そこでハッとして慌てて離れる。つい、あの誰かに言われた『王を守れ』という言葉を深く捉えてしまっ……重く考えてしまう。

「あ……いや……その……本当に……心配したのだぞ。……と言うかお前、気のせいかな少し若返ってないか？」

「その、これは……だな……」

「それがあなたに課せられた呪いなのでしょう？」

「……ッ！」

我が子の姿をした者にあっさりと真実を告げられる。

「呪い……？」

虚白はポカンとした様子で言う。

「自分自身、人に呪いを与えた身ですからそういうのわかるのですよ。あなた、死ねないのでしょうか？」

「つまり……不死……？」

「ここからは、俺自ら話す。不死と言うのはあながち間違っていないが、正確には一度死んだら呪いを与えられた時の姿に生き返る。つまり、俺はあの毒矢で死んで、呪われた数年前の姿で生き返った」  
「ちょっと待て、お前は何の罪を犯した？ 呪いと言うことはそういうことだろう？」

「お前を殺そうとした時に話しただろ？ 獣共に襲撃された、と」

「まさ……か……」

「……俺がその獣を残らず駆逐した。呪いのことなど怒りで忘れていた」

その時に呪われていたからこそ、黒夢を殺そうとした母、つまり

彼の妻を裁いても何も起こらなかった。

だからこそ、今まで王自ら人に仇なす者らを葬りさっていた。

「結局、呪われてるのはお互い様ではないか……」

雪はずっと、降り続くばかりだった。

## 第9話：其の言の葉は呪詛となりて（後書き）

展開、早……。。

虚白が異様な程、彩亜曰く気持ち悪い程、王に執着してるのは訳ありで。

後々本編に書けたらいいなあと（希望かよ）

当然変な意味じゃないってことだけは把握してほしいッス……。

虚白の王への執着&バカ保護者っぷりを想像以上に表現しようとした結果。

精進して己の小説の腕をもっと磨かないと……（涙目

## 第10話：騒動の後は安らぎか疑念か

ここは狼たちの洞窟。

空露は最近起こった出来事について考えていた。自分を、身の回りのことを初めて知り、爪痕を残したあの出来事。

まず、空露の人としての名【阿黒】は黒夢と兄弟だということ。ずっと生まれ変わりがどうか考えたことが無いから正直今でも信じられない。

次に、黒夢と自分の父、彩亜は現在では元と言えど王で、その友人が白狼王——否、虚白だった。

虚白と【阿黒】はほぼ同時に死んでしまったので、多少の時間差はあっても狼として同時期に生まれ変わった。それで狼で考えたら親友、人間で考えたらお兄さん（？）と言う何とも言えない関係となっている。

さらに、虚白が白狼王として『何かを守る力』を授けてくれて、自分の命に再び息吹を与えてくれた神の波長が黒夢とピッタリ合う。そのため、神様がこの世界に降りる時は黒夢の体を借りている。つまり王が言うには、黒夢は『神憑き』らしい。

つまり、虚白は『神の力』を持った者、彩亜は『呪われた不死王』、黒夢は『神憑き』という、それぞれ神に何かしら関係があることになる。

最後に——

「空露ー。何なんだよ、アレー。何で王は何にも言わないんだ？」

仲間の白狼が来て空露に言った。

「ああ、その、気にしないでくれ。王が良いと言ったら大丈夫なのだろう。私たちにできるのは、ただ王の御言葉を信じるだけだ。…だが、後で様子を見てこよう」

「そうかい、頼むぞー」

そう軽く言って歩いて行ってしまう。

——これが、最後の事柄。仲間から言われるたびに頭痛くなる事だ。

空露は仲間の言う【アレ】の場所に向かう。長いため息をつきながら。

「てめえら、なあにやってんだあっ!!」

荒々しい言葉と同時に【アレ】らを見た。

そして言ってから自分の言動に気付いた。

わ、私としたことが…

気を取り直して先ほどの言葉に驚いた彼らが口を開く。

「どうかしたのか？」

「同じく」

「お前ら、うるさい。宴会するならもっと静かにやれ」

騒いでいたのは黒夢に彩亜——

白狼王の願いで行き場を無くした元・人の王とその子供はこの洞窟に住ませることになった。

他の狼たちには恐ろしい人間では無いと言う無茶な説得だったけれども。

仲間の狼が言ったアレは彼らではない。本当のアレとは……

「おー、空露く、お主も酒を飲めく♪」

——虚白。白狼王Ⅱ虚白ということを経た狼たちは誰も知らない。つまり別の人間がこの住処に居ると思われているのだ。

「断らせていただきます。っていうか宴会しないで下さい。王は職務に戻っていただきたい」

「かったいのー、空露はー」

「堅くて結構。それと黒夢にお酒を飲ませたらダメです。未成年ですから」

「大丈夫ですよ、今の私『神様』だし？」

黒夢じゃなくて神だったか。でもそれが問題じゃない。

「あなたが何だろうと黒夢の体だということに変わりは無いでしょう？」

「これ、色がワインみたいだけどジュースです。ちゃんとして黒夢くんのことを考えてお酒は我慢してるんですから」

小さい子供の姿で胸を張って言った。

「……ところで……」

「ああ……うん……」

空露の言わんとしてることがわかったらしい。神と彩亜は苦笑しながら相づちをうつ。

「……あの、我が王……完全に酔ってますよね？」

二人とも無言で頷く。

「にやにをお主ら話しておりゆのだった！もっと飲まにゆかつ！」  
二人と話したのは少しの時間だったが、あの間に虚白の滑舌がま

わらなくなっている。

「王の威厳が……。仲間にはとても見せられない……」

うなだれて誰に言うわけでも無かったが声に出して言った。

「狼の時ではどうなのかは知らないが、昔はアイツこれでもかっつくらい弱かったから……。あれも一応白狼王であり虚白だ。受け入れろ、我が子よ」

「貴様に我が子扱いされるつもりはない」

——冷たい言い方をしたが、本当は知っている。虚白も自分も死ぬ時に最も嘆いた男だ。仲間が殺されたら敵討ちだと怒ることの出来る男だ。

「う、バツサリ言うな……。まあ、そんな言い方されても仕方がないか。一度殺そうとしたからな……」

何だか少し悲しそうだ。

「……お前……」

「あ、でも虚白を殺ろうってのは諦めてないからな？」

コロッと表情が変わり、笑顔で物騒なことを言う。

「白狼王の恩を仇で返すつもりかっ！あー、少し反省の色が見えたと思ったら全然反省してないしっ」

「俺はあいつに助けてくれなんて一言も言ってない」

その彩亜の言葉でふと思うことがあった。

「そういえば、何故王はこいつを助けた？」

「俺もそれは聞きたいな。小さい頃から少しケガしたら大袈裟なことを言ってたよな？『死ぬ』って言ったら簡単に自ら命を絶とうとす

るくらい命令にも忠実だったし。従者だからといっても流石にここまでだと気持ち悪いぞ？」

二人は虚白へ視線を注ぐ。

「ひーみーっーだ☆」

「……王」

空露はイラッと来て睨み付ける。

「じよ、冗談に決まっておろう？ そんな殺気のこもった目で我を見るな。おかげで酔いが覚めたぞ」

「酔いが覚めて結構。さあ、問いに答えて頂きたい」

「んー、親友だからじゃ駄目か？」

「そんな気持ち悪い友は俺はいらない」

きっぱりと彩亜は言い切った。

「……う……今は言えぬから……また今度に……な？」

その瞬間、狼の姿になると駆け出した。

「ちっ、逃げたか……」

「仕方ない。神よ、貴方なら何か知っているのではないですか？」

「……いえ、何も」

何か少し微妙な間があった気がする。

「ま、あいつはきっと必ず話してくれるだろう。それまで時を待とうな？ 我が子よ」

「だから貴様に息子扱いされる覚えはないっ！ まずは王を敬えっ！  
！」

「いやいや、お前が認めるまでずっと我が子といい続けるつもりだぞ？」

「……まるで反抗期の子と親のケンカですね。その分仲が良いとは



言いますが……」

神がボソリと小さく呟いた。

——これから狼の住処は少し騒がしくなるだろう。

しかし、彼らはまだ知らない。

これからしばらく、狂乱に溢れた騒動が続くことを。各々が抱える苦悩につきあたることを。

## 第10話：騒動の後は安らぎか疑念か（後書き）

これで、一章終了。次回二章を。

どういう話にするかは検討中なので、今まで以上に間が空くかと。もしかしたら新年になってたりしてwww

・今更だけど、メインで初の女性キャラが神様。

・黒夢くん未成年につき、お酒禁止。アルコールは20から！

一章だけで最終章への伏線たっぷりなので何か書き逃すかもしれない不安。頑張れ自分の記憶力。

## **2章もとい第11話：歪みの物語は再開す（前書き）**

お久しぶりです。

今回はいつもより短めですよ。

## 2章もとい第11話：歪みの物語は再開す

——変わらぬものなど無い。例えそれが永久に続きそうなものでも。

この世界は相変わらず白く染まっていた。……いや、相変わらずと言うのは間違いかもしれない。

何せ今日はいつも以上に吹雪いていて、視界がとても悪かった。

「本気で言ってるのか……お前ら……」

人の形をした異形が周りの白狼たちへ呆れながら言った。

「当然だろうが。……それとも、彩亜は死にたいのか？」

他と比べ、やや大きな狼が人語で返す。

「別に俺は死んでも『アレ』で平気だったの。あー、でも黒夢のことを考えたら駄目か」

彩亜と呼ばれた彼は、元・人間である。『呪い』により不死となった異形。

今話した狼は白狼王。字の通り、白狼たちを纏める王だ。

「お父様ー、早く行こうよー♪」

小さな男の子がわくわくした様子で彩亜の服を引っ張っている。

この少年が先ほどの会話に出た、黒夢。

彩亜の息子であり、世界を構築したと言われる神が世に降りる際

に彼の体を借りる。

神曰く、波長が合うらしい。

「我は認めぬぞ」

「えー、行きたい行きたいー!!」

「……こら、黒夢。駄々をこねるな」

王の傍らに居た狼——空露が子供をなだめた。

黒夢は少し拗ねたように頬を膨らました：が、そんな子供らしい  
雰囲気が一変した。先の話題に出た神だ。

「……大丈夫ですよ。いざというときは私が黒夢くんを護りますか  
ら」

声は黒夢だと言うのに不思議な響きである。

「神ともあろう貴女がそんなことをしていいのか？」

「私にとって彼は世に降りるために大事ですから」

あくまでも己の為だと言いたいらしい。

「……仕方がない。同行を認めよう。例え死なぬ身でも、神がついて  
いようと、主らが危険だと感じた時点でここに帰させるからその  
つもりでな」

「王っ?!」

渋々言う王の答えに空露はつい声を発した。

王はどうしようもない、と言うような表情である。

「……では、あと少し経ったら狩りに行く。すぐさま準備をするよ  
う——」

「もう用意してあるよ♪」

「早っ!!」

いつの間にかいつもの黒夢に戻っていたこと、支度がもう済んで  
いたこと。その2つが王と空露を驚かせた。

「早く行こっ？」

「準備がいいな、黒夢」

彩亜が我が子の頭を撫でる。子はえへへと満面の笑みであった。

「……行きましょう、王」

「ああ」

王はスウツと息を吸い込み、この洞窟に響き渡る声で言った。

「皆、狩りに出るぞ！」

狼の言語を訳せば、簡潔な一言だった。

王を先頭に狼たちは外に向かう。白き体軀は吹雪と背景の中に溶け込んだ。

この狩りが、彼らの歪んだ物語の再開だと言うことを誰もまだ知るよしもなかった。

## 2章もとい第11話：歪みの物語は再開す（後書き）

改めてお久しぶりです。

2章の話の展開にうつすらと流れを考えたので更新しました。

実は××が●●で……△△を出して……なんて考えてますが、絶対途中で予定が狂ってる気がしますwwww

## 第12話..音を立てて 崩れて

「流石に……こうも吹雪いていると……収穫はあまり望めないんじゃないのか？冬眠とかそういう奴らもいるだろ？」

彩亜が白狼王に話しかける。

「いや……そうでもない。この世界はいつも雪原だろう？それ故に生きるために、冬眠しなくても生きられるように寒さに適応した動物へと進化する。我らはそれらを必要最小限度で狩っておるのだが……、お主ら人間は肉を喰らってはいなかったのか？我の記憶ではうろ覚えだが食べた気がするぞ？」

「俺らも肉は食べてたさ。雪原で見かけた獣の干し肉を少しずつ野菜と一緒に。だが、あまり見かけないモノだったからな……」

「フン、人間はやはりその程度になってしまうか。狼の嗅覚を持つてすればすぐに見つかる」

自信満々にそう言うので思わず彩亜はツッコんだ。

「……いや、お前も元・人間だろうが」

一人と一匹は互いに笑い合う。苦笑が少し混じった笑いであった。

「白狼王！……見つけました」

一匹の狼が駆け寄り報告をする。

「スノーバツファローのようです」

スノーバツファロー。先程、王が説明した進化した動物のうちの一匹。雪原に生える雑草を餌としているが、それでも充分に食事が足りない場合は小動物を食べ、最終的手段として同種族を喰らうこともあると言われている。

「既に死んでいるようです。この極寒で凍っておりますが如何いた



しますか？」

「それを洞窟へ。おそらくバッファロー一頭であれば次の狩りまでにはいいであろう」

「了解致しました」

狼はすぐさま他の白狼へ伝えに行った。

「……」

暫し、沈黙が流れた。

「……なあ、虚白」

「……何だ」

彩亜がその静けさを破って話を切り出す。

「ひよっとして……狩りが終わり、とか言わないよな？」

「いや、終わりだぞ？」

すると彩亜は何も言わずに白狼王へ微笑んだ。

「……？」

王はよくわからないが笑みを返す。

「この馬鹿野郎☆」

「……ぐはあっ!？」

——蹴った。しかも容赦なく。

「な、何故蹴るのだ!」

「馬鹿か、お前は馬鹿か。何処が狩りだ。ただ凍死してた奴を持ち帰っただけだろうが。これじゃあ狩りじゃなくて探索だろ」

「わ、我らにとってこれが“狩り”だ! あまり普通に狩りをすると生き物の生態は簡単崩れてしまうほど繊細なのだから仕方ないだろう! 『狩りは地味でも最低限に』が我ら白狼のポリシーだ! !」

「……力説し過ぎじゃねえか？」

彩亜の言う通り、白狼王は力説し過ぎて息切れしている。

「白……どうしたの？」

とても幼い声がした。声がした方を振り向くと黒夢と空露がここに近付いて来ていた。

「いや、何でもない。しかしそちらこそ何かあったのか？」

「他の狼たちは洞窟に戻っています。王もそろそろお戻り下さい」

「……父親は無視か」

「誰が貴様を親と認めるかつ」

……また親子喧嘩が始まった。

——そう王が思った時だった。

吹雪の中、一瞬遠くから何かが光ったと思うと、それはこちら目掛けて飛んできた。

「……っ！」

空露は彩亜の目の前で来たものをくわえてキャッチする。

飛来したその正体は、いつかどこかで見た矢だった。

「一体……どこから……」

また何かが煌めく光。

一本、二本、三本……

何回取ろうにもこのままではキリがない。

「彩亜っ！空露っ！汝らは黒夢を守れっ！！」

澄んだ声が響くと同時に矢が一瞬で消滅する。

「虚……白……」

雪のように白い髪と肌、若々しいラフな服装と違和感がありすぎる和風な扇。

王が居た場所に青年は立っていた。

「……出てきたらどうだ？」

低い声だと言うのにどこか澄んだ響きが発せられる。

その声に応じたか、“相手”はククツと言う笑いと共に姿を現した。

「お前はっっ?!」

空露はたまらず声をあげた。

「……お久しぶりですねえ……」

何故なら彼は、あの黒夢と空露の事件に居た、彩亜を殺めようとした人物だったからだ。

神による呪いを受け、亡霊にとり憑かれていたはずの。

「何故、貴様がここに居るッ!!」

「貴方方に教える義理など無いのですが…まあいいでしょう。私は王子をお迎えに来たのですよ」

「王……子……?!」

“王子”と言われて思いつく者は1人しかない。

——黒夢。

今、この場にいる“普通”の人間にしてそれらを取りまとめる王の息子。

「待ってたよ、たいが對牙」

少年は何も驚くことなく、ただそう言って微笑んでみせた。

## 第12話：音を立てて 崩れて（後書き）

途中今までの話と矛盾しそうに……

何はともあれ一章のあの人名前付きで再登場。

余談ですが、出てくるキャラにはみんな宝石関係の名前だったり。宝石の名前を当て字にして決めてマス。虚白なんてわかりやすいですね。

クロム○○って言う宝石はいくつかあるみたいです。クロムは元素だから…。

気が向いた人は空露、彩亜、對牙の名前の元ネタの宝石と石言葉を調べてみて下さい。面白い石言葉があったりシマス（ワラ

### 第13話..そして純粹に歪む

「黒夢……？ お前、何を言って……それに『待ってた』？ 一体どういう……」

彩亜が混乱混じりに問うても少年はただ静かに微笑むだけだ。

「何も知らない可哀想な父親ですねえ……。そんな父親は置いて、王子、こちらに」

「わかったよ、對牙」

黒夢は對牙の方へと歩み寄って行く。

「待て、黒夢ッ！」

虚白たちが止めようとしたが、彼は制止を振り払い、對牙の隣まで行くところの方を向いた。

「……貴様、黒夢に何をしたつつつ?!」

空露は今すぐにも噛みつく勢いで言った。

「別に何もしてませんよ？これが王子の意思です。ねえ、王子？」

黒夢はそれに頷いて肯定の意を表した。

「うそ……だ……」

項垂れる彩亜を余所に彼らは話し出した。

「對牙。何も言わずに行くともみんなも心配するから話した方がいいんじゃないかな？」

「おや、王子は優しいですねえ。彼らに話してどうこうできるとは思えませんし、いいでしょう」

「……ねえ、白。僕はみんなを幸せにするために出かけるからね？」  
ただ、純粹な笑みで。

「な……んでッ……?!」

「あなた方は世界の宝珠の話を知っていますか？」

「宝珠だと……?!」

彩亜は知っているようで驚きの声をあげる。

「おい、宝珠とは何だ？」

白い狼が問うと、對牙は何かの書物を読み上げるようにして言った。

「宝珠。世界を創ったと言う宝珠。強大な力故に世界創造の後は二つに分けられた。一つは世界の果て、賢き獣の手に渡る。一つは神の加護の元、聖なる洞窟へと封じられた」

「その二つが合わさりし時、願いを叶えん」

對牙の言葉を黒夢が繋げた。

「……願い？」

その質問に答えることなく黒夢と對牙は交互に話し続ける。

「父上、僕はね、前から父上が呪いで死なないことくらい知っていたよ？どれだけの命を消したかも知っていたよ？そして、白が元人間で父上と仲が良かったことも」

「……なっ?!」

「神様が僕の体を借りている時に神様の記憶を偶然見ちゃったんだ。それも結構前のことだけど。對牙はね、そんな僕を知って宝珠のことを教えてくれたんだ。何でも願いを叶える宝珠のことを。だから計画したんだ。“どうしたらここから抜け出して宝珠探しに行けるだろう”って」

「そこで我々は母親に目をつけました。阿黒の件で黒夢のことを良く思っていないから。彼女に言ったのです。『王子は阿黒について知ってしまいました。彼は酷く貴女の愛する王を恨んでいるようです。子供と言って気を抜いてると寝首をかかれるかもしれません』とね」

「あの時は驚いたよ。母様が突然外の景色を見せるとか言っ  
て連れ出してくれたと思ったら刺されちゃうんだもん。死ぬかもしれなかったし、それが對牙の計画だと気付くの  
に少し掛かっちゃっ

た」

「ええ。だから私は近くですぐに王子の元に行くことができるように待機していました。しかし、近くにあなた方がいた」

『――人柱にならないといけないんだ、って』

あの時の少年を思い出す。あの震えた声すら演技だったのか？この小さな少年の？

自分の目には、あの少年が嘘を吐いていると思えなかった。何故。どうして？

虚白も、彩亜も、空露も、あまりにも衝撃すぎて、まるで思考が止まったかのように動かない。いや、動けなかった。

「まあ、とにかく王子があなた方と出会う前に起こった出来事はそういうことです。我々はこれから世界創造の宝珠を探す。そして、王子の願い――、『虚白が王の従者であり人の姿をしている、阿黒が死ななかった、彩亜が罪を犯さなかった、そして人間への呪いがない』世界になることを、叶えます」

「悪いことは全部なくなってしまった方がいいに決まってる。そんな世界になれば、父様も、白だって『阿黒』だって、みんな平和に暮らせるじゃない」

悪い夢だ。これは、悪い夢。

幼いはずの子供が純粹にも世界を変えようとしている。

世界の改変は、今の存在の消滅に近い。

虚白が人であることは、今の狼という存在がないのと同じ。

阿黒が死なないことは、空露の存在が消えるのと同じ。

彩亜が罪を犯さないことは、この若々しい姿ではないのと同じ。

呪いがないことは、この世界と人の罪を否定するのと同じ。

「さて、王子。本当にそろそろ行きましょう。少しでも早く願いを叶えたいのでしょうか？」

「うん、そうだね。それじゃあ、“新しい”世界で会おうね、みんな」

二人が身を翻し、こちらに背を向けて歩み出す。

「……………」

突如、風が強くなり、視界が雪で覆われた。

咄嗟に何かを発した声とその風によってかき消されてしまった。

虚白自身、何を言いたかったのか、言葉と共に風にさらわれたかのように、わからなかった。

少年の名か、はたまた男の名か。

引き留めようとしたのかもしれないし、ただ怒りや悲嘆から罵りたかったのかもしれない。

確かなことは、自分たちは二人を止める可能性の一つを逃してしまった、と言うことだった。

この場に残ったのは、王と、狼と、不死者。そして、言い表せぬ負の感情だった。

その日、猛吹雪の中間こえた狼の咆哮はどこか悲しげだった。



### 第13話..そして純粋に歪む（後書き）

本当は黒夢がああなる気はなくて、当初は對牙だけだったんデス…  
…。何故か、話の展開を考えたらこうなりました。でも後悔はして  
いません。

そして、これでようやく「黒白の王」の本編と言うべき内容に入  
りました。

1章はいわゆる前フリみたいなものデス。10話分も書いて前フリ  
というのは少し変な感じはしてイマス。でも正直5章くらい続くと  
いいなあと思ってマス。

何卒、何卒よろしくお願いシマス★

## 第14話：光から闇に 闇から光に

空気が重い。重苦しい。

外の雪のような体躯をした狼たちが住む洞窟はどこか暗かった。湿気のせいではない。

先日起こったことのせいだ。

王も彩亜も洞窟に戻ってからというものの、何も喋っていない。狼たちは、そんな2人の様子と黒夢が帰って来ていないことを気にしているようだった。

だが2人から聞き出せず、皆空露の元へ聞きに来ていた。

空露は「暫く放って置いてほしい」などとその場を誤魔化した。

仲間たちから解放され、時間が出来たので、白狼王の元へ行くことにした。

「……王」

「……………」

返事が無い。

今、狼の姿をしている彼の目には光が映っていなかった。

「……王!」

もう一度、先程より大きめに言うが、またしても返事が無い。

偶然なのか分からないが、同じ部屋に居た彩亜にも呼びかけた。

「……人の王よ」

「……何だ」

こちらは反応があった。

だが彼は、狼の王ほどでは無いが、目が虚ろで生気を抜かれたような表情をしている。

返された言葉も、どこか感情が宿っていない。

「貴様も、王も、帰ってきてからずっとこうなのか？」

「……」

無言で肯定の意を表す。

しかし、彩亜がショックを受けるのは分かるが、王がショックを受ける理由がわからない。

黒夢と過ごしたのは一年も経っていない、少しの間だ。それでも黒夢と親しかった空露も多少ショックは受けたが、虚白たちほど酷いものでは無かった。

「……あの」

再び彩亜に話しかけようとしたが、彼もとうとう押し黙ってしまった。

いくら呼びかけようがどちらも返事をする気が無いしかなかった。こんな状況で、時間が経てば経つほどだんだん苛立ちを覚えた。威厳のある王も、彩亜も、ウジウジしすぎだ。

自分が認めた、彩亜に関しては認めようとしていただが、そんな2人はこんなにも落ち込んでいる姿を見ると、自分自身ですら馬鹿馬鹿しくなってきた。

「王、彩亜」

2人の名前を呼ぶ。当然とも言うかのように、返事は何もない。

「……王、彩亜！」

口調を強くしても、無言のまま。

「虚白、彩亜！！いい加減にしろッ！！！」

「！！」

空露が王の真名を呼び捨てで口にし、敬語ですら無く、空気が震えたかのような怒声。

2人は、ハッと空露の方を見た。

「いつまでもいつまでもウジウジウジウジしやがって！貴様らがショックなのはわかる！だがそれでいいのか？！行動しなければ何も

変わらないだろうが！特にそのいつもは飄々としていて何考えてるかかわらない王！！貴様が彩亜よりも淀んだ空気を纏っているものだから、私が認めていたことが馬鹿らしく思えてくる！！もしも貴様らがあと3日こんな状態が続くようならば、私は単独行動させてもらう！！！」

一気に言い放った。正直、思いつくままに叫んだので、自分で何を言ったのかわからない状態である。

そこでフツと空露に澄んだ声が響いた。不思議な不思議な響き。まるで己の主である王にどことなく似ている響き。

『少しだけ、身体を、借りますね』

「あ……あなた、は……？」

身体が言うことを聞かない。いわゆる取り憑かれるという感覚なのだろうか、意思が奥の方に引っ張られていく気がする。黒夢を思い出す。彼も、こんな感じだったのだろうか。

『肩の、力を抜いて下さい。私は、——なのですから』

その声の通りに空露は力を抜いた。彼女ならば、仕方がないと。入れ替わってもいいかと。

「本当に、落ち込んでる場合じゃないんですよ、虚白ちゃん達」

結局、空露は“神様”と交代した。

身体は動かせないが意識と視界はそのままなのが何とも不思議な気分ではあったが、あの時から彼女の存在があやふやになっていただけに居たという事実を知った安心感と、彼女がこうして自分たちの前に姿を現したという疑問点から傍観することにした。

「むむう……。狼の姿はやはり人と違いますねー。まあ、新鮮であることに変わりませんが」

神は面白いようで、ぐるりと回ってみせる。

虚白も彩亜も突然のことだったせいなのか、ポカンと口を開いていた。……が、すぐに我に返って疑問をぶつける。

「何故、貴女がここに……？」

「しかも、どうして空露の身体で？」

その質問は待っていたとばかりに尻尾を振ってみせた。空露からは分らないが、恐らく自分の顔は笑っているのだろう。

「そりゃあ、黒夢くんが私を拒絶しているからですよ。無理矢理身体を乗っ取ろうとすると、見えない壁に阻まれてしまっんです。その壁はまるでドス黒い闇のようでした」

先程のはしゃいでいたのとはうってかわって、とても空露とは思えない低い声。その声質が真剣だと言うことを示していた。

「恐らくあの對牙、でしたっけ。あの男が黒夢くんに妙なことを口走ったせいでしょう。あの子はとても純粹で、それこそ神の器として相応しいものだったのですが、その純粹さ故に――歪んでしまっただ」

神は、苦しくて、悔しかった。黒夢に見え隠れする闇を前々から感じていたからこそ。

大人になったら、大体の人間はその純粹さを無くす。そして辛く暗く重い過去から、心が闇に蝕まれることだってある。だから、黒夢の闇もその一部だと思っていた。思いこんでいた。目を剃らしてただけだった。神と言う役職の重圧を。望んでもいないのに人間に呪いを与える役目を。

私は――、何のために神様という世界の立ち位置に立ったのだったっけ。

誰も、彼女の思いはわからない。みんな急に押し黙った神を不安そうな目で見ていた。

今日もまた、雪が世界を白く染めていた。

## 第14話：光から闇に 闇から光に（後書き）

おー久ーしぶりデース♪

学校が忙しいと思ったら風邪を引き、治ったと思ったらテスト、終わったと思ったら学校が忙しく……なんて無限ループに陥ってしまったorz

と、前置きはここまでにして、本編の後書きを。

前回、黒夢が“ああいう”行動をしたせいで雰囲気が暗くなっています。そんな中、黒夢を媒介にして存在がややふやになっていたあの人が出てもらいました。

各章は各キャラの話を重点に置いてイマス。1章はただの前フリみたいなものでした。2章は神様デス。

と言っても話の展開上、多くは語れませんが。本当は空露予定だったので、もしかすると空露に急遽変更するかもしれません。

神様の昔を、目的を、少しでも語れたらと、思いマス。

## 第15話..銀世界の優しく愚かな神様

「神よ……?」

不安げに紡がれた声が響く。

彼女はハッと意識を周囲に向けると、大丈夫かと聞くかのように狼の王がこちらを見ているのに気が付いた。

「す、すみません。少し考え事をしてまして……。話を、戻しますね」

「……もしかして、黒夢じゃねえと調子出ないんじゃないのか? 顔色、悪いぞ?」

彩亜がふと疑問に思ったようで、投げかける。その問いが、白狼王も神も目を丸くした。

「……白狼なのによくわかりますね」

「そりゃあ、少しの間とは言え、伊達にこいつらと暮らしてないんでね。さすがに狼の表情くらい理解出来てくるさ」

その語る様子はやや自慢気である。そして嬉しそうでもあり、ちらりと王の方に目配せをした。

「こいつも不安で不安で仕方ないって顔してるしな。……で、俺の質問の答えは?」

「……そういうわけではありませんよ。この姿は呪い故に生まれ変わってしまったてはいますが、黒夢くんと兄弟だったことだけあります。神の器として身体をお借りすることが出来ました」

さらりと答えを述べる。それでもどこか辛そうな表情であることには変わらない。

「なら、どうしてそんなに悲しそうな顔を?」

彩亜の言葉が、気遣いと分かっている、刃となって胸に突き刺さる。

神という役の重圧が恐ろしい、だなんて。

世界を世界として動かす役であるが故に責任感に潰されそうにな  
っている、だなんて。

とてもじゃないが言えない。言える訳がない。

「気のせい、ですよ」

笑って、言えただろうか。言えてなかったとしても、聞いてほし  
くないことだと、思ってもらえただろうか。

「そうか。そんな顔してもあんまり説得力が無いが、神様だし、仕  
方ないよな。神様つつつても、きつと色々あるんだろうしな」

——そう。なら、仕方ないよね。そっちにも、事情はあるんだも  
の。

「……っ！」

重なった。彼女の過去に映る人物と。

「……ん？どうかしたのか？」

「おそらく彩亜の性格上、無理にでも聞き出すのかと思ったのであ  
ろう」

「虚白、皮肉にしては俺を何だと思ってるのかと聞きたいくらいの  
酷い言い方だな」

その言葉を機に、二人は皮肉を言い合い出す。

——似たもの同士、ですね。お二人は。

ああ、“人であった”時に思ったことがあったつけ。

どんなに苦しいことがあっても、それが無かったかのようにいつ  
も笑ってしまった。

「……ぷっ、ふふふふっ！！」



思わず吹き出してしまった。笑いのツボ、という訳ではないのだが、あまりに過去と重なるものなので、“あの時”のことを思い出さずにはいられなかった。

「え、ちょっと、神様ー？何をそんな笑って……！？」

「そうだ。何故笑う？我らのこの会話に何かおかしな点でも？」

「会話か。今のが会話だって言うのか、この馬鹿狼王」  
ばかうおう

「白狼王だ、この腑抜け彩亜」

今度は子供のケンカのような言い争いが始まりそうだったので、言葉を挟んだ。

「いえ、少し過去を思い出してしましまして……ふふふっ」

「過去、か。神の過去と言うのは気になるな」

彩亜が興味をそそられたのか言葉に食いつく。

「集落の文献に書いてあるようなことは人の空想によるものばかりだったからな……。神である本人に聞けるのなら確かであるし、ぜひ聞きたい」

「やめておけ、先も悲しそうな顔をしておったではないか。お前だって色々あるからと聞き出すのをやめたと思ったら、興味が無くてやめただけだったということだな。今は興味津々に聞こうとしておるようだし。……全く、神も人と同じように問われたくはないことだってあろう？最近の我々で言えば、黒夢のこと、と……か……」

たしなめるつもりで狼の王は言ったのだろうが、黒夢のことを言うってから、声のトーンが急激に下がった。どうやら先程まで気が紛れていたのが、今名前を出したことで思い出し、悲哀の感情が込み上げてきてしまったのだ。当然、彩亜も白狼王ほどでは無いが、気分が落ち込み始めたのは確かだった。

「あー、そのことなんですけど、私はそれを説明するために来た訳であって……」

慌てて二人の感情を切り替えようと必死に言う。

“ こういうこと ” が、神である彼女の甘いところでもあった。

人間のように、他人の感情に同調し、痛みがまるで自分の物のように悲しむことが出来たから、完全に非情になれない。容赦なく罪を犯した人々に呪いを与える度に心を痛める。

神と言うにはまだ未熟と言ってもいいのかもしれない。

これが、黒夢に記憶を見られた原因でもあるのだから。

油断を、していたのだ。黒夢の目で、人の姿を見て、人らしい感情で同情したり、激昂した。その他人への思いやりが、己の借りている身体とシンクロして、うっかり少年の過去を覗いてしまえるようになっていた。神はそれに気付いていたが、他人の過去を見ることは良くないと、見ようとはしなかった。けれど、その逆もまた通用していたのだ。

己の身体を持ち主が神の記憶を見られるようになっていたと言うことが。

神はそれには気付かない。今もどうして見られたのかと思っっているくらいだ。

そして、今。同じくして記憶を見てしまっている者がいることにも神は気付かない。

皮肉にもその者は、かつての器であった少年の兄弟であった。

彼——空露は、二人の少年と少女の姿を見ていた。

一人は幼いながらも白い髪を持つせいか、大人びて見える。

もう一人の少女は雪景色の中ではとても目立つ緋色の髪で、少年

を見て微笑んでいた。その表情は可憐とも麗しいとも言えた。

少年が、少女を怪しんでいるのか顔が強張っている。それでも彼女は微笑みを絶やさずに、言葉を紡いだ。

「こんにちは、白<sup>しろ</sup>くん」

それは少女らしくて、けれどもどこか澄んでいて、雪原の大地のどこまでも響くような声だった。

## 第15話：銀世界の優しく愚かな神様（後書き）

神様の過去に突入の巻。

13話で黒夢くんが神様の過去を覗いたとか言っていたのは実は伏線で、空露が見ちゃいました的な。……伏線ってわかりにくいですか、そうですか。

あ、過去話と言っても登場人物は神様とは限りません。最後の白髪の少年に関してはお察しの通りデス。多分、普通に考えてもらえばいいデス。と、言うより白髪系の登場人物一人しか居ないので余計に分かるかと思ひマス。

次回からは過去話デス。再び伏線大量発生する予感がしていますが……、最終的に全部回収できるのか不安なんですけど……。何はともあれ、雪国の世界の話はまだ続きます。

## 第16話..少女は世界に音を鳴らして

「誰……？あと白くんって僕のこと？」

白髪の少年は少女に話しかけられ、つい思わず言葉を投げかける。

「私？私のことはどうだっていいじゃない。それに、今私とあなた以外に誰がいるって言うの？つまり、白くんって言うのはあなたのことよ」

「……何で、白くん？」

「この雪みたいな色の髪だから白くん。それ以外に理由はないですよ？」

そのままだったが、少年にはその理由が分からないらしく、不思議そうにキョトンとしていた。

「……僕の家族も、知り合いも、みんな白い髪。そんなのが理由だったらみんな『白くん』だよ？」

彼にとっては白い髪は普通だったらしい。

しかし、少女は驚くことなく言う。

「知ってるよ」

少しだけ真剣な眼差しで。

「あなた、『白の一族』なんでしょ？白い髪だもの、すぐにわかったわ。なんでも旅をしていた一族が、その旅をやめて今日から私たちの集落に住むんだって。扱いは王様と同じなんだって」

「……よく知ってるね」

彼は一族の話を嫌うのか顔を背ける。

「父さんから聞いたの。もしかして、『白の一族』って言われるの、イヤ？」

「……嫌も何も、こここの人間はこの髪を見て一族って知っただけで奇妙なモノを見るような視線をしてくるから」

だからこそ、彼は彼女に話しかけられて驚きだったのだけれど。少年はここで話は終わりだというように背中を向け、どこかに行こうとした。

「待ってよ、白くん。お友達になろっ？」

少女は彼の前に回り込み、両手をギュッと握って言う。

この雪の寒さのせいで、お互い冷たい手をしていた。

「……友達？」

彼は友達ということに興味が無かった。けれど、目の前の少女が、自分を一族の者だと分かってもなお関わろうとするのに、興味を惹かれ始めていた。

「そう、友達。みんなきつと自分たちと違うから、白くんたち一族と話し辛いだけなんだよ。だけど私と仲良くしてたら、いつか集落の人たちも慣れてくれると思う」

「そんなの、綺麗事じゃないかな」

「やってみなきゃわからないよ。でもとにかくさ、どんな理由だろうと、私はあなたとお友達になりたいな」

手に込める力を少し強めて、にこつと笑いかけた。

その笑顔があまりにも綺麗だったから、少年はやや頬を薄紅色に染め、顔を背けた。

「……っ」

「どうかな？ダメ、かな……？」

少年の方がやや背が高いので、少女の表情は綺麗な笑顔に加えて上目遣いに見えている。

余計少年は彼女の顔が見られなくなる。

「べっ、別に勝手にすればいいよっ！」

思わず強く言いすぎたと思ったが、彼女の表情は変わらない。それどころか、ますます嬉しそうに顔をほころばせる。

「なら、勝手にお友達になっちゃいまーす♪あ、そうだ。こんなに話して何だけどさー、白くんのお名前教えて？」

「……虚白。字は、虚しい、白色」

「んー、虚白かぁー。やっぱり呼び方は白くんのままでいいかなー」  
少女は何か考えているのか「うーん」と唸っている。

しばらくすると手をポンッと叩いた。何もないはずなのに頭に電球が浮かんで見える。

「虚しいって言い方は無いんじゃないかなあ。まるで自分をけなしてるみたい。……勝手な予想だけださ、白くんの名前はこの雪みたいに綺麗っていう意味なんじゃないかなあ？」

虚白と呼ばれた少年は、この少女の言葉に耳を傾ける。

「雪ってさ。こうやって手で触ると溶けちゃうよね。……儂くて、虚しいよね。けれどその儂さが、虚しさがあるから綺麗に感じるんだ。ね、虚白って名前もそういう考えと同じだと思えば印象も変わらない？」

「……わ、わからないや」

彼女は怒ることもせず、ただ天使のような微笑みを絶やさないまま。

「きっと、いつか白くんもわかるようになるよ」

「そうかな」

「そうだよ」

もう一回、彼女は虚白の手を握る。今度は少し温かく感じたように思った。

虚白は彼女の名前を呼ぼうとして、呼べないことに気がついた。

「え、えと、名前は……？」

「ああ。そういえば言っけなかったね。言わないと白くん私のことなんて呼んだらいいのか困るもんね」

「音嘉<sup>いんか</sup>。字は音に……何て言ったらいいのかな。うーんとねー……」  
少女はさらさらの雪の地面に名前を書いてみせる。

少し不格好だが『音嘉』という字が刻まれる。

「これでオッケー。白くん、分かった？」

「うん、分かったよ、音嘉……」

遅れて小さく「ちゃん」と付けて言った。

「音嘉ちゃんなんて言わなくていいよー。音嘉って呼び捨てでいいよ？」

「音嘉」

復唱するように呼ぶと、少女が照れくさそうにしている。

「……何だか変な気持ちだなあ」

「……どうして？」

微笑みも苦笑へと変わっているような気もする。

「音嘉って名前だからね。私のあだ名、インコなの」

「インコって鳥の？」

「そう。名前を一字変えたただだから余計に言われる。鳥繋がりでカナリアとも言われたりするけど」

音嘉は「私には似合わない」と謙遜気味だった。

「鳥って綺麗だからいいと思うけどなあ……」

「それは白くんの考えよ。私はあまり好きじゃないわ。私は私だもの、どんなものでも別の何かと比較されるなんて真っ平」

今度は虚白が何かを考えようとしているのか、わずかな時間押しし黙る。

「カイン、とかは？音嘉の嘉の字を最初に持っていただけなんだけど」

言った途端に少女がぱあっと笑う。虚白にはまるで一輪の花が咲いたみたいに見えた。

「カイン！インコよりよっぽどいいわ！じゃっ、白くん限定の呼び方ね！」

虚白はむずがゆい気分になった。まるで昔からの友人のように話しかけてきた少女に不信感があったはずだったのに、今はこんなにも体の奥底が熱いような、分からないような何かがこみ上げてきそ



うだった。

暖かな、感情。

この集落に来てから、家族以外に抱くことの無かった感情。

彼女の存在が、冷たい雪に触れると溶けるように、虚白の凍てついた感情が解きほぐされていくようだった。

## 第16話：少女は世界に音を鳴らして（後書き）

音嘉ちゃん登場の巻。彼女の名前はインカローズからデス。この過去話は伏線ペタペタ貼る予定なので……後々全部回収出来ると思いますってイマス。……回収できるかなあ……（え

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0488i/>

---

黒白の王

2011年8月31日06時20分発行